

(略) 収穫物は市街の上杉、稲田、三沢らの雑穀商人と取引が行われ、多くは船舶で小樽方面へ送られたが、大正9年頃からは網走の商人久田らと取引して網走まで運搬する者もあった。運搬は、夏は回漕店による海上運搬、冬期間は農民自身が馬そり運搬をしたものである。自分で運搬することによって運搬料だけ高く売ることができたのである。

網走までの運搬は、旧街道の山道からボラ街道を経て、能取湖の氷の上をなるべく真っすぐに卯原内市街よりも嘉多山入り口近くへ上がるように進む。10数台の馬そりが白い氷原に黒々と列を描いて静かに渡っていく。リンリンと冴えた鈴の音がいつまでも続いている。

時には氷を踏み割って湖水に落ちることもあるが、夜中の12時に部落を出て、8里の道のりを雪に覆われた山坂を上り下りして網走に着くのは午前5時か6時。商店の前で主人の起きるのを待って取引を済ませる。町を廻って買い物をして引き返す。家に着く頃には白一色の部落の彼方に冬の陽が沈みかけている。人も馬も休養の暇もなく、その夜の11時頃にはまた出かけることもある。こんなことが3晩も続くと1日くらいは休養しなければ人も馬も続かなくなる。こうした仕事が1月末頃から3月10日頃まで続くのであった。